

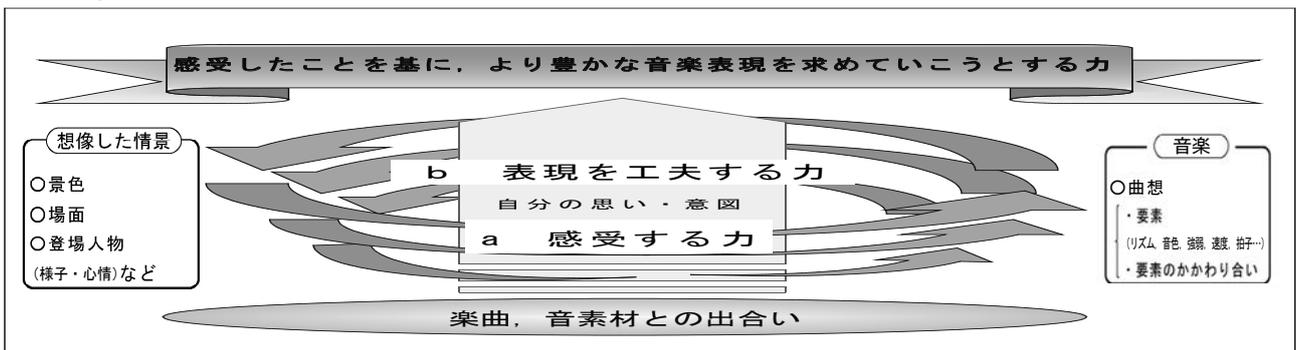
音楽科

1 育成したい「思考力」

- a 感受する力：音楽を形づくっている要素や、そのかかわり合いから生まれる曲想を基に、音楽の情景を想像する力
- b 表現を工夫する力：音楽から想像した情景と結び付けながら、音楽を形づくっている要素や、そのかかわり合い方を、自分の思いや意図をもって創意工夫する力

学習指導要領において、表現及び鑑賞の活動の支えとなる指導内容が〔共通事項〕として示されている。そこでは、音楽のよさや面白さ、美しさを感じ取る際に聴き取るべき音楽の要素が明確に示された。

そこで、本校音楽科では、その〔共通事項〕に示された音楽の要素を基に感受したり、表現を工夫したりすることを重視し、そこで必要とされる力をまとめた。それが、この「思考力」である。



(1) 感受する力

音楽は、リズムや音色、強弱などの様々な要素により特徴付けられている。そしてこれらの要素のかかわり合い方によって独自の構造をもち、それが楽曲に固有の曲想を生み出す。

これら楽曲の独自性を基に、そこから情景を想像する力が「感受する力」である。このように「感受する力」とは、音楽的な刺激を受け取るという受動的な面にとどまらず、その刺激に対して自分の心象を形成するところまで含めてとらえる。

また、実際の学習においては、「『タッカ』のリズムがはずんでいて、踊っているような曲だなあ。」と音楽を特徴付けている要素から情景を想像することもあれば、逆に「お祭りのような曲だ。」と最初に情景が浮かび、続いてその根拠となる要素を聴き取っていくこともある。感受する力は、このように音楽の要素と情景の双方向を行き来しながら高められていくのである。

第3学年「ストーリーを描きながら聴こう - 『ファランドール』 -」の実践より

【本単元で育成したい「思考力」】

音楽を特徴付けている要素から二つの旋律を聴き分け、楽曲全体の構成に着目することで情景を豊かに想像する力

子どもたちが音楽鑑賞をする際には、強弱、速度、音色、高さ等、音楽を特徴付けている要素に着目して旋律の違いを聴き分けている。『ファランドール』の鑑賞において、子どもたちは始めの場面で繰り返された旋律を聴き、「王様の歩き方が速くなった。」、別の旋律へと変化した中の場面では「登場人物が変わり、にぎやかな雰囲気変わった。」、最後の場面では「みんなが仲良くなって一緒におどっているみたい。」と感じ取った。それに対し、どうしてそう感じたのかを問うと、始めの場面では「同じ旋律が繰り返されていたから登場

人物は同じで、音楽が速くなったから歩き方も速くなった。」、中の場面では「旋律が変化して、速くて高い音が軽やかになっていたので。」、最後の場面では「二つの旋律が重なっていて、明るい音でどんどん速くなっていくから。」という答えが返ってきた。

このように、情景と音楽を特徴付けている要素、さらには繰り返し、変化、重なりといった楽曲全体の構成とも結び付ける力が感受する力である。



【音楽に合わせて登場人物の動作を付ける】

（２）表現を工夫する力

既存の楽曲の演奏を工夫する際には、自分の思いや意図を明確にもつことが求められている。そして、その思いや意図に合った表現をするために、音楽を形づくっている要素や、そのかかわり合い方を創意工夫するのである。

具体的には、例えば「速度の工夫」のように要素自体を工夫することもあれば、「旋律の呼応」のように単一要素のかかわり合い方の工夫、さらには、「旋律とそれを演奏する楽器」のように別の要素のかかわり合い方の工夫もある。

なお、この「表現を工夫する力」は、上で述べた「感受する力」に支えられていることは言うまでもない。情景を想像することで、「このような音楽にしたい」という思いが一層強まるからである。また、音楽を形づくっている要素が、楽曲にどのように働きかけるかを感じ、理解していなければ、要素を選んだり組み合わせたりすることもできないからである。

第3学年「ボディパーカッションで『雨』をあらわそう」の実践より

【本単元で育成したい「思考力」】

雨が降る様々な情景から音楽を特徴付けている要素をとらえ、それを生かしてボディパーカッションで雨の表現を工夫する力

子どもたちは雨の情景をビデオで視聴した後、それを基に雨が降る様子を表そうと、体の様々な部位をはじく、こする、叩くなど音の出し方を試し始めた。そして、雨の降り方を「設計図」に表し、速度、強弱、リズム等の要素をとらえた。そして、それらを生かしてボディパーカッションで雨の表現を工夫していった。本時では、音楽を特徴付けている要素のうち、強弱の付け方に焦点化して取り組んだ。

前時までの子どもたちは、力を加減することや、音を出す体の場所によって強弱が付けられることを認識している。しかし、場面の変化に合わせて激しい雨を表そうとしても、個々による強弱では表現の幅に限りがある。それを可能にするためには、友達と協力し、人数を変えればよいことに気付いていった。そうすることにより、強弱の差を大きくしたり、音の重ね方を変えたりしながら、次第に雨粒が増えていったり、急に止んだりする雨の降り方をより自然に、より豊かに表現することができるようになっていった。

このように、雨の音から想像した情景を表すために、強弱の付け方等の音楽を特徴付けている要素を工夫しながら表現を工夫することが「表現を工夫する力」である。



【いろいろな音の出し方を試す】